慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大日本讀史地圖(吉田東伍著, 芦田伊人修補, 冨山房發行)
Sub Title	
Author	吉田, 小五郎(Yoshida, Kogoro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.3 (1935. 12) ,p.170(536)- 171(537)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

企畫されてゐる。殊に、今日傳はる野史の目次に見えながら、その本文を缺いてゐる卷二十一本紀第二十一の仁孝天皇紀と、卷六十四列傳第四十三武將三十の文恭公傳（十一代家齊）のうちの、仁孝天皇紀の未定稿の一部が、忠彥最後の隱棲地たる京都の淨蓮華院に於て、著者自からの手によつて發見されたことは、最も注目に値するものであり、その發見は學界にとつても慶事と言はねばならない。外に忠彥の遺著編について其の代表的なものを擧げて說明を附し、遺詠・書狀などをも收錄せられ、百二十頁の小册ではあるが、よく完璧なる偉人の傳記となつてゐる。御三家の威勢と天下儒員の協力に成る大日本史と、一介の貧書生たる忠彥の獨力によつて成された野史とを比較し、忠彥の苦心を追想してその英靈に敬意を表すると共に、かゝる書の自力印行を企てられたる著者の精神にも誠に尊しとせざるを得ない。（有賀春雄）

大日本讀史地圖（吉田東伍著　芦田伊人修補）

富山房發行

歷史家は登山家の如く精密・正確な地圖を必要とする。登山家は幸に參謀本部陸地測量部から發行される廉價にして優秀な地圖を直ちに求め得られるが、歷史家はそれをどこに求めたら良いのであらう。

私は十年來吉田東伍博士著「新編日本讀史地圖」を座右に置いて少からざる益を得て來た者であるが、餘り頻繁に使用して感謝の念など寧ろ忘れた形であつた。たゞ恨みとするのは特に私の好む方面が幾分缺けてをりこの點申し分があつたのである。

所が今年夏その新版があらはれた。名も「大日本讀史地圖」と「大」の字が加はり、內容も之に應じて膨脹し堂々たる大册である。相變らず故吉田東伍博士の著とあり、蘆田伊人氏の修補となつてゐる。之は蘆田氏の今の世には珍らしい恩師に對するゆかしい心情の表はれ、謙遜の態度である。實は吉田博士が他の二氏と共に高橋健自博士の發案に基いて作製せられたるものは遠く明治三十年の發刊にかゝり、その後、大正六年、十二年の修正版は總て嘗て吉田博士に師事したりといふ蘆田氏の手になり、而も此度の新版は前版の六十七圖に比して八十二圖になり、その八十二圖中舊圖の存するもの僅か十八面、他は悉く新作、若しくは大に訂正を加へたるものにかゝる。之を以て蘆田氏は修補と稱してゐられるのである。

內容を見るに前版に比して製版更に鮮明、種々工夫が加へられ、從つて最後の圖版說明も書改められ、又圖版の增加せる中には、先に私が申し分ありといつた圖版も幾つか增補せられ滿足した。

然し考へて見ると蘆田氏は幸福な人である。この新版を完成される迄の氏の苦心は恐らく想像以上と思はれる。私のいふのはつまりその苦心の幸福である。誰人も學問の分野に住む人は嘗て發表した自己の仕事に滿足してゐる人はないであらう。貧しい自分の經驗でも校正の進行中既に誤謬を發見し訂正したき衝動にかられる。況んや二年、三年、五年と經てば愈々缺點は擴大增大して來る。訂正したくとも中に事情はそれを許さないのである。この意味に於て蘆田氏の如きは己が功を誇らず、而も默々として理想若しくはそれに近いものを遂げられる私のいふ「幸福の人」である。

「大日本讀史地圖」は又私の長き伴侶となるであらう。紹介といふより小供らしき感想の一端を述べたに過ぎない。寛恕を乞ふ次第である（吉田小五郎）。

吉野朝史（中村直勝著　星野書店發行）

南北朝時代の研究家として、又古文書學に造詣深く、著者の令名には既に定評があり、同時代に關するもの丈でも、「南朝之研究」、「北畠親房」等がある。

何時も乍ら著者の南北朝時代に對する情熱には深刻なるものがあり、著者は南北朝時代を語る時最も幸福であるかにさへ見へる。

「私は思ふ。人物と思想と經濟力と、この三者の交互相互相關作用が、歴史を構成し、歴史を進展せしめ、人生を導くものであると。されば私は、毎に此の三者の關聯交渉を觀る事を以て、歴史學の本領と考へるものである。」これは序に於ける著者の宣言である。個人としての著者の歴史觀である。

本書は、總説、各説の前後二篇に分れ、著者は先づ前篇に於いて、この時代を通ることによつて、その前後には、非常な相異が見出される。鎌倉時代を中世の終とすれば、室町時代は近世の初少くともこの頃に中世が終り近世が初まつた。もし、之を經濟組織の方面から見れば、この時代を中心として、米穀經濟から貨幣經濟への變移があり、思想界に見るならば、神佛の宗教的世界は終りを告げて、人間の世界が導き出される。

もし、吉野朝とその財政々策、京都側とその財政々策、武家の財政を説くことに依つて經濟關係を裏づけんとし、更に、本地垂迹説が反本地垂迹思想に依つて搖がされたことは、結局、佛教の至高至貴な尊嚴に對して、批評を加へることとなり、佛教の權威は傷けられた。これが卽ち神佛より人への階梯を示すものである。もし、親房が皇道と神道、神道と人道とを一にして説いた處に、神道を神祇の世界の道とせずして、人の世の道にも及ぼして説いた處、ここにも神佛の世界から人間の世界への降下が見られる、として思想關係を明にしてゐられる。

著者の認められる歴史の構成要素、人物と思想と經濟力の人物は最後の武士とその家筋に纏められてゐる。

後篇は主として著者が嘗て發表したものの中から吉野朝史に關係ある論文を類輯したもので、見方に依つては、前篇に於いて記した處を詳細に考證したことにもなり、又後篇に於いて考證論究されたものを一通り纏めたものが前篇である、といふ。皇室、人物、社會、經濟、文學、追加の六篇何れも前篇に於ける、著者の歴史に對する強い信念から、その區分が設定されてゐる。

勿論歴史は人間と社會との所産であり、思想と經濟組織との結合であるとする著者の主張の當否は姑く別問題として、讀者は兎に角この吉野朝史に於いて一つの史觀を看取し得るであらう。しかもすぐれた著者の史眼に氣付くであらう。

著者の撓まざる研鑽に對して改めて敬意を表するものである。

（菊判本文五一一頁　圖版九、定價三圓八十錢）（淺子勝二郎）